

資料

機能的アセスメントに基づく他傷行動の改善への支援 — 知的障害児通園施設での取り組みの事例から —

山根 正夫* 齊藤 瑞恵** 花田 栄子** 平澤 紀子*

<要 旨>

他傷行動を頻繁に示す、注意欠陥多動性障害のあるアスペルガー障害の疑いのある5歳の男子に対して、知的障害児通園施設において機能的アセスメントに基づく支援方法をどのように適用することができるか検討した。スキュータープロットを利用することで他傷行動の機能特性が明らかになり、結果的には医療との連携による相乗効果も考えられるが、行動の改善がみられ、通園施設でのプログラムに沿った活動が可能になった。

キーワード：知的障害児通園施設 他傷行動 機能的アセスメント スキュータープロット

I 問題と目的

発達障害児・者の示す他者に対する攻撃とりわけ他者に外傷を負わせるような他傷行動は本人のライフステージごとの種々の活動プログラムへの参加の制限をもたらす。これらの他傷行動に対しては、伝統的には、行動の生起が予測される場合は最初から集団活動に参加させないといった方法をとる場合が多い。また、行動が生起すれば叱責し、その場から分離するといったような罰技法を用いたり、さらに強度が増せば医療との連携での薬物療法がなされる。いずれの方法も、どのように行動すればよいのかを教授するものではない。また薬物療法も、同時に必要な行動を形成するという建設的な観点が薄かったといえる。

一方、近年、このような行動問題を社会的相互作用の文脈から捉え、個人の行動を環境的な先行条件と結果条件との機能的な関係から分析する機能的アセスメントに基づいた支援方法の効果が示されている。例えば、平澤・藤原(2000)は、他傷行動の機能的アセスメントに基づいて、他傷行動を起こすきっかけとなる状況を改善する先行条件の操作、他傷行動と機能的に等価な行動の形成、他傷行動を維持している結果条件の操作を含む包括的な支援方法によって、他傷行動の低減だけでなく、望ましい行動を積極的に支援する positive behavioral support を試み、肯定的な結果を報告している。

そこで、本研究では、家庭や知的障害児通園施設(以

下、「通園施設」とする)におけるグループ活動などの参加を制限していた他傷行動を示す就学前の男児に対して、この機能的アセスメントに基づく支援方法が、どのように通園施設において効果的に実施していくことができるかについて検討することを目的とした。

II 手続き

1 対象児

1) 男子、5歳10か月(平成15年10月現在)

2) I園在園期間:

平成13年5月から平成15年3月

3) 診断名:

注意欠陥多動性障害の症状があるアスペルガー症候群の疑い

4) 発達の状況:

(1) TK-TB式(田中ビネー式知能検査) CA4:10
MA4:5 IQ91(平成14年11月5日)

(2) CARS(小児自閉症評定尺度) CA5:1 合計得点28 CARSの結果からは自閉症の範疇ではない。高得点の項目としては、「変化への適応4:日常のルーティーンに変化が起こる時混乱する。」「活動水準4:多動性が生活のあらゆる場面でみられる。」「聴覚による反応3:無関と考えられる音に注意が転導し、その場で実行を迫られている行動から注意がそがれる。音刺激に対する反応に一貫性はない。手で耳をふさぐ場合とそうでない場合とがある。」(平成15年1月14日)

* 西南女学院大学保健福祉学部 福祉学科 助教授

** 北九州市立到津ひまわり学園

5) 行動特徴：

見える物、聞こえる物などの視覚や聴覚の刺激に過剰に反応し、自分で決めた一定のルールに固執する。衝動的な他傷行動が頻繁に生じ自己統制ができない。また、言語による簡単なコミュニケーションはとれるが、ややパター的な発語の繰り返しが多く、質問に対する答えも一方的で相互作用が成立しにくい。

6) 気になる行動や困っている行動：

- (1) 理由がある場合とわからない場合があるが、人を叩いたり、ひっかいたり、蹴ったりする。
- (2) 自分で決めた一定のルールにとらわれ、それを変えることができないこだわりがある。
- (3) 移動するときは常に小走り、落ち着きがなく、部屋では、離席が多く棚の上に上ったり部屋から飛び出すことも多い。
- (4) 集団活動中、気になることがあると落ちつきなく動き回り自己統制ができない。

7) 家族の状況：

年度途中頃まで、母親は本児の知的な面の伸びと家庭での母親との1対1の場面は指示が通りやすいことから、通園施設での活動プログラムでの本児の行動を母親は十分認識していなかった。父親も本児の行動をやんちゃととらえ、いつか落ち着くと考えていた。転居をひかえ移行先に本児の状況を説明する必要もありK市Sセンターに受診し、通園施設の職員の園での活動状況の説明の中で、集団の中では自己統制することが非常に難しいということを両親も認識してきた。

2 知的障害児施設I園の状況

1) 日課：

I園の日課は図1のとおりである。

2) クラス・グループ活動の状況：

主要な活動は、概ね生活年齢に対応する年少2クラス、年中1クラス、年長2クラスの5つのクラス活動

と、社会性やコミュニケーション、認知能力、行動特性等の子どもの状態に応じてプログラムが展開される5つのグループ活動で構成されている。

3) 本児の所属するグループの特徴：

年齢4歳から6歳で、高機能自閉症1名、自閉性障害と精神遅滞4名、精神遅滞5名、アスペルガー障害（ADHD疑い）1名、ダウン症候群1名、脳性まひ1名の計13名のグループに所属している。このグループの年間の目標は以下のとおりである。

- (1) 手遊び、体操、ゲーム、ダンスなどの活動を模倣し楽しんで行う。
- (2) グループ活動を通して簡単な指示を理解し、集団活動に楽しんで参加できるようになる。
- (3) 様々な活動をとおして子ども同士の関わりをもてるようになる。
- (4) 自発的に言葉表現する機会を増やし集団の中でも積極的に言葉を表出できるようになる。
- (5) ポーテージクラスルームカリキュラムのユニット活動を参考にしながらそれぞれの子どものスキルの般化と新しいスキルの学習する。

III 他傷行動の機能的アセスメントに基づいた支援方法とその結果

1 機能的アセスメント

機能的アセスメントは、O'Neil, Horner, Albin, Sprague, Storey, and Newton(1997)の手続きに従って、以下の点について行動観察し、他傷行動とその先行条件、結果条件との機能的関係を分析した。

- 1) どんな行動をいつ頃からどの程度起こすようになったか：平成13年5月1日I園に入園時より
- (1) 入園当初から、ひっかく、押し倒す、噛みつくなどの衝動的な他傷行動は、大人、子どもに関係なく頻繁に見られた。

10:00	10:30	11:00	11:20	12:00	13:00	14:00
登園 朝の準備	自発活動	あつまり おやつ	クラス活動 グループ活動 個別指導	昼食	自由あそび	降園

図1 I園の日課

(2) 入園当初から、スモックに着替えない、汚れても新しい衣類に着替えない、靴下を脱がないなど特定の衣類にこだわる、季節の変化に応じた衣類を示しても着替えないなどのこだわりがみられた。

(3) 入園当初から多動で常に職員がついて安全確保の必要があった。

(4) 入園当初から自己統制がとれず、持続して椅子に座れない、特に広い場所では、動きが多い、他傷行動が多く見られた。

2) どんな場面で、その行動を最も起こしやすく、その結果どんなことが生じるか：

行動問題について、その生起状況を活動や場面との関連で分析するための図2に示すスキャッター・プロット(平澤・由岐中・園山, 2001)を使用した。

(1) 原因が特定できる他傷行動は、例えば「本児が欲しいものを他児が持っている場合」に、攻撃すると結果として他児が泣いたり逃げる。逆に攻撃される時もあるが、その時はもっと激しく攻撃する。その場合職員は制止する。また、「本児がこだわっていることを他人が違うようにした場合」の他傷行動については大人は制止する。その際本児が納得できるように大人が説明するか、本児に合わせられることであればあわせる。さらに「以前何かされた経験がありそれを思い出した時」他傷行動が生起すれば、大人は制止する。その行動に対しては、理由を尋ね、そういうことをしてはい

けないことを伝える。

原因が特定できない、例えば「突然、横にいる人に向かって飛びついたり、ひっかいたりする」場合は大人が制止する。理由を尋ね、そういうことをしてはいけないことを言う。

(2) 「衣類がほんの少しでも濡れた時」は必ず着替える。自分の衣類でないに着ない。「忘れ物がある時」は泣いて「いる」と叫ぶ。本児が納得する代わりに物を大人が準備する。「いつもと違うことがある時」は前もって説明している。

(3) 過活動に関する問題

(4) 集団活動など「人の話を聴く場面や何かを始める前や何かを思いついた時」、広い場所や騒がしい場所に行った時自己統制がとれない。この場合大人が横につき行動を制止する。

3) どんな場面で、その行動を最も起こしにくく、その結果どんなことが生じるか：

2)-(1) 自分の好きな遊びを一人でしている時(トーマス図鑑や好きな本を見る、プラレールで遊ぶ、トーマスやアンパンマンのビデオを見る、コンビカーに乗ってまわる)は、結果的に職員がそばにならなくてよい。他の子どもたちも落ち着く。

2)-(2) 1日がいつもと変わらない時は興奮することが少ない。

2)-(3)(4) 自分の好きな遊びを一人でしている時や

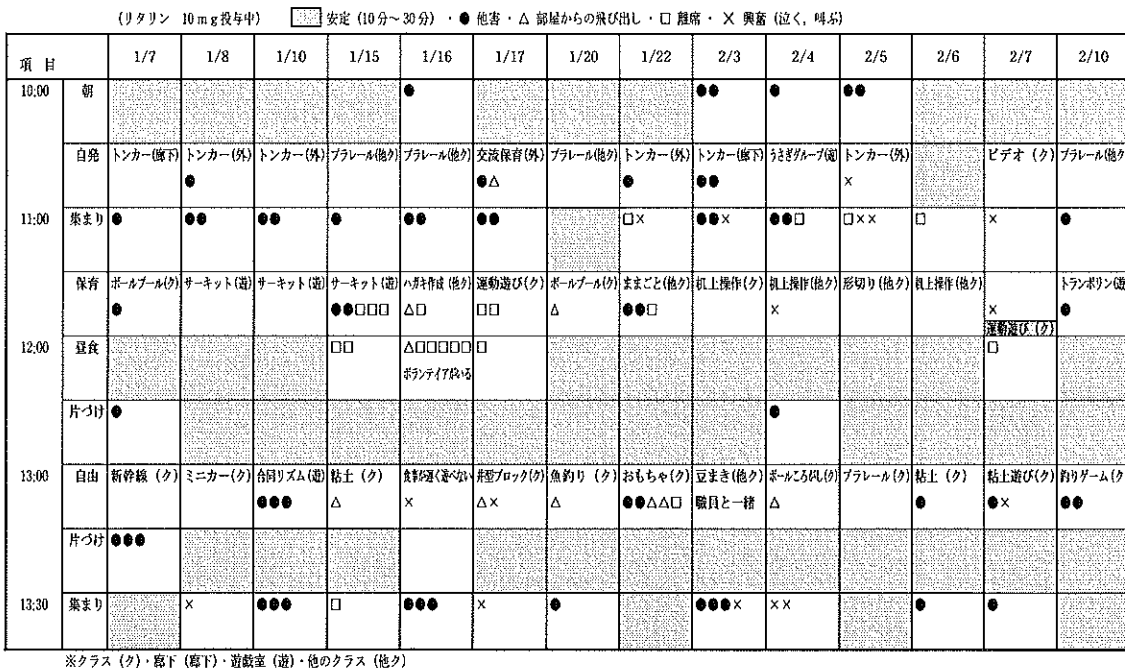


図2 スキャッタープロット

机上作業（シールはり、はさみ操作、糊付け、粘土遊びなど）をしている時は職員がそばにつかなくてよい。

4) 本人の好きなこと（物）・得意なこと：

(1) 好きなこと（物）は、「トーマスの図鑑」「ウルトラマンの絵本」「プラレール(列車に関するおもちゃ)」「トーマスやアンパンマンのビデオを見る」「コンピカーに乗る」などである。

(2) 得意なこととしては「机上作業（シール貼り・はさみ操作・のり付け)」「列車に関するおもちゃの組み立て」「ロボットをつくる」などである。

5) 本人の嫌いなこと（物）・不得意なこと：

「激しいリズムの音楽」「大きな音」「かたちを描く（少しでも思い通り描けないと興奮する)」「お面をかぶった人、変装をした人(他人でも自分でも嫌う)」「自分で決めた一定のルールに合わない行動や言動を他人がすること」が嫌い、不得意なものとして観察された。

2 機能的アセスメントに基づく他傷行動の機能の推定

機能的アセスメントおよび表1のスキーマープロットのように結果から、どの時間帯にどのような場面で他傷行動が生じやすいのかが明確になり、他傷行動を起こしやすい状況として、

1) 朝や帰りの集まりなどの人が集まる場面、自由活動場面。

2) 欲しいものを友だちが持っているときに他傷行動が生起する、反撃されるとより激しくなる。

3) 集まりなどで職員が名前を呼ぶときに返事を求めたり、本人に名前を言わせるなどの内容を変更をしたり、集まりで新しい歌を導入するなど、本人がこだわっている行動を他者が違うようにしたとき。

4) 以前に他児と玩具の取り合いをし負けた場合などの何かされたことを思い出したとき、時間を経て「やつつけなくちゃ」などといい通りすがりに攻撃する。

5) 自分で決めたルールに合わない行動や言動をする人がいる。

6) 突然横にいる人に向かって飛びついたり、引っ掻いたりすることもある。

があり、「本人にとって嫌悪的状況では、他傷行動を起こすとその嫌悪的な状況が除去されたり、回避できる」。

「欲しいものがある状況では他傷行動を起こし欲しいものが入手されることで他傷行動が維持されている」ということが他傷行動の生起の仮説として考えられた。

3 機能的アセスメントに基づく支援方法とその結果

1) 本人に対して：

先の機能分析の結果、他傷行動の予防としての先行条件の操作、他傷行動と機能的等価な行動、衝動性の自己制御といった行動の形成、および他傷行動を起こした後の結果条件の点から介入を試みた。

(1) 他傷行動の生起を予防する先行条件の操作

- ① 他傷行動が予測されると直前に職員が制止する。
- ② 約束表：図3のような約束表を作成し、終わるたびにシールをはり、4つになったら降園時にトーマスのシールをはる。約束表の導入当初は、これらの行動の結果、再現確率を高めるための強化としてシールを貼ることは機能しなかった。これはシールを貼るカードがロッカーの中で、見える場所に無いことも原因と考えられた。しかし、毎回行動をする前にどのように振る舞えばシールが随伴するのかを説明をし、1度帰りのあつまりで着席行動がとれなかった時、シールがもらえない経験をしたことで行動の結果としてのシールの機能について効果があわれてきた。

・あさのじゅんびをKくんのつくえのまえでします。
・あさのかいは、いすにすわってせんせいはなしをききます。
・ごはんのときは、さいごまでいすにすわってたべます。
・かえりのかいはいすにすわっておはなしをききます。

図3 約束表

③ あつまりで使用する離席カード：

数字の「1」「2」「3」を印した数カードを作成し、3回まで離席してよいが4回目には、椅子がなくなるというルールを設定し、最初離席があると「3」と書いてあるカードから使用した。

結果、目前にカードがあり、数字が少なくなっていくことで、本人にとって解りやすいルールだったこともあって、数字が変わると急いで席に戻るという行動が出現してきた。

④ 朝の準備は個別の机を使用し、刺激を少なくする。机に絵カードのめくり式スケジュールと約束表を置いておき朝の準備を意識させる。

投薬の効果もあるが、職員が時々促しの声かけをすれば、一連の動作ができるようになった。

⑤ いつもと違う活動がある時は、前もって納得できるように説明する。

(2) 代替行動の形成

① 何か要求があり、すぐに対応できる内容の時でも、時間を待てるように椅子に座って10数え、その行動が

遂行できたら誉める。

② 自分の欲しいものを他人が持っているときは、「貸して」と言う機能的に等価な行動の形成を目標にして職員が発語を促進し、できたら誉める。

(3) 結果条件の操作

他傷行動が生じた場合、制止し、「お友達泣いてるね、痛いよね」と話し説明する。

(4) 投薬

リタリンの服薬の結果としては、集団場面での離席が減り、内容によっては本人がこだわりとして許せず他傷行動をおこしていた事柄も説明を聞き納得できることがでてきて、自己統制できる場面もある。また、持続できる活動が増えた。

2) 家族との連携：

毎日、園と親の間でお互い連絡帳に記入したり、緊急の場合は、電話で情報交換したり、家庭訪問や個人懇談を行うことで情報交換を密にした。

家庭で母親ができることから取り組もうということで、トイレで排泄が成功したら園と同じシールを強化として貼るようにし、10枚たまったら園に持ってきて、職員がご褒美を提示することにした。

結果、お互いある程度の情報は把握できた。しかし、家庭環境と学園の環境の相違から、本児の行動に対し職員の見方と親の見方が違っている場合、園での状況を理解してもらうことが難しい場合もあった。

3) 関係機関との連携（将来の進路および他機関との連携）：

平成15年4月より転居のため、N市療育支援センター（週2回）、N幼稚園（週3回）に移行することが予定されており、N市療育支援センターには、移行をスムーズにするためI園担当者が訪問し情報交換をする。

診断名が確定していないこと、過活動への対応方法について平成14年11月にI園の担当者がK市Sセンターに、園での状態のVTRを持参し、臨床心理士の評価を含めて小児科医に行動の状況について説明し、診察場面だけでなく、日常場面の情報を提供し、多動に伴う行動問題について受診した。その結果、リタリン5mg朝2週間、12月から投薬開始し様子を見る、結果他傷行動は変化がないが、あつまりの場面や給食の場面での離席が目立たなくなった。その状況はK市Sセンターの小児科医に担当者が連絡する。平成14年12月K市Sセンターに母親が説明に行き、平成15年1月よりリタリンを10mgに増量し様子を見ることになる。移行先にも診断名、発達、行動特徴などを伝達した。

IV 考察

本研究は、通園施設という日常場面において、どのように機能的アセスメントに基づいた支援方法を進めることができるかについて、事例的に検討した。日常場面においては、活動や場面との関連において、行動問題の生起要因を推定することが妥当であると考えられるが、本事例においても、スキッター・プロットを利用することで、比較的容易に機能を推定することができた。また、こうした分析に基づいて、他傷行動の先行条件の操作、他傷行動に変わる代替行動の形成、結果条件の操作という包括的で、望ましい行動を積極的に促す支援が可能となった。

医療との連携によるリタリンの服薬で多動性が緩和し、指示や説明を聞くことが可能になり、刺激が制御された状況下では結果的に他傷行動が生じにくくなったという相乗作用の効果は大きいと考えられる。これらは医師の処方による薬物療法と併行した代替行動の形成も大きな役割を果たしていると考えられる。他傷行動の自己統制はグループ場面への参加を容易にし、本事例のように知的機能が正常域ということから予測される幼稚園や保育園での集団場面への参加に通じていくものと考えられる。

付記

本研究は西南女学院大学付属保健福祉研究所の相談支援活動において実施された。

本報告の公表に当たっては保護者の同意を得た。

参考文献

- 1) O'Neil, R. E., Horner, R. H., Albin, R. W., Sprague, J. R., Storrey, K., Newton, J. S., : Functional Assessment and Program Development for Problem Behavior Practical Handbook second edition, Brooks / Cole Publishing Company, 1997
- 2) 平澤紀子・藤原義博：養護学校高等部生徒の他生徒への攻撃行動に対する機能的アセスメントに基づく指導、行動分析学研究、Vol 15, 4-23, 2000
- 3) 平澤紀子・由岐中佳代子・園山繁樹：問題行動を有する自閉症者のQOLの向上を目指す援助方法の開発－実用的な機能的アセスメント様式とその活用方法－、西南女学院大学紀要、5, 104-112., 2001
- 4) Luiselli, J. K., & Cameron, M. J., Antecedent Control, 1998 園山繁樹, 野口幸弘, 山根正夫, 平澤紀子, 北原信訳：挑戦的行動の先行子操作, 二瓶社, 2001

Support of an improvement of the aggressive behavior based on
functional assessment:
A case study in the day care center for preschool children
with intellectual handicaps

Masao Yamane Mizue Saito Eiko Hanada Noriko Hirasawa

< Abstract >

We examined a support method on the functional assessment based practice for a boy who was 5 years old with Asperger syndrome and with attention deficit hyperactivity disorder showed aggressive behavior frequently in the day care center for children with intellectual handicapped. A function characteristic of an aggressive behavior was clarified using scatter plot. As the result of the multiplication with medical care, intervention showed that aggressive behavior was reduced and activity along the program in a going to the day care center was enabled.

key wards: day care center for children with intellectual handicapped, aggressive behavior,
functional assessment, scatter plot